

共同研究 ● 映像の共有人類学 ― 映像をわかちあうための方法と理論 (2009-2012)

本共同研究では、文化人類学のなかで映像を活用することの諸問題を「共有」という言葉をキーワードにして考察している。多くの人にとって、映像を共有するという言葉から最初に連想されるのは、人類学者がフィールドワークのなかで撮影し、後に編集して完成した研究成果としての映像作品を人々にいかに役立てることができるのか、といった問題であろう。「人々」とは、調査地の人々、研究者、そして、一般の人々のことであり、つまり、いかに調査地の人々に研究成果を還元し、様々な地域を研究する人類学者と映像を通して比較研究を行い、最新の研究成果を社会に向けて発信していくことができるのか、がここでの問題となる。

以上の問題には、映像と共有をめぐる重要な問題が含まれている。しかし、この問題を議論する前提として、そもそも映像を制作するのは誰なのか、あらためて考える必要があろう。というのも、たしかに制作するのは人類学者であるが、逆に、人類学者が映像制作の過程で調査地の人々から受ける恩恵や貢献も少なくないからである。

現在、多くの人類学者が調査に映像を活用するようになった。映像機器がさらに小型化し、扱い方が簡素化すれば、この傾向は今後ますます浸透していくであろう。ただ、個人でこれほど手軽に映像を扱うことができるようになったのは最近20年ほどのことであり、それまでは人類学者と調査地の人々のあいだで様々なかたちの共同制作が試みられていた。

そこで、本共同研究では、昨年度、個人での撮影が可能になる以前の人類学映像の制作を振り返ることにより、現在の人類学における映像制作のあり方を相対化し、そこにみられる共有の問題について考察を進めてきた。

映像に映しだされるもの

フィールドワークでは、調査地の人々と信頼関係を築くことが最優先されるが、それは映像制作の場合も同様である。人類学者は各々が選んだ社会に長期間にわたり通い、当該社会に生きる人々の生活、その物質的側面や精神的側面を長期的な視野で観察する。そこでは、プライベートな生活空間が調査の現場になることも多い。謝礼を支払うことによってではなく、信頼関係のもと人格のすべてを受け入れてもらうことにより、はじめて調査は可能となる。傲慢な態度をとれば受け入れてもらえず、調査の継続はむずかしくなる。身を危険にさらすこともあるだろう。信頼関係の構築は、たんに学問の理念や倫理として重視されるだけでなく、調査を無事に進めるため

の現実的な術でもある。

このように、フィールドワークでは、調査を進めることと調査地の人々と関係を築くことは近い意味をもつことになる。そして、映像には両者の関係のあり方が、ときに撮影者の意図を越え、明確に写り込む。映像の技術は稚拙でも、両者の信頼関係が映像にしっかりと反映されていればそれは優れた人類学映像であるといわれることがあるのは、このような理由による。民族誌の執筆を目的とするフィールドワークがそうであるように、人類学映像を制作する場合にも、まず重視されるのは映像を通して信頼関係を築くことであり、そのような関係性を基礎にして、これまでに数々の映像の共同制作が行われてきた。

共同作業としての映像制作

本来、映像制作は共同作業により進めるものであり、人類学映像の制作者たちは、調査地の人々の理解と助けを得るなかで作品を制作してきた。例えば、同時録音式のビデオカメラが普及する以前は、撮影と録音は別の人が担っていた。この場合、撮影者、録音者ともに現地語を習得していることが好ましいとされる。撮影対象者の会話内容が理解できなければ、次に起こることを予測することができず、撮影の好機を逃してしまうからである。このような事情から、人類学者は調査地の人々に映像制作の過程で、様々な協力を求めてきた。

例えば、フランスの民族学者ジャン・ルーシュ(1917-2004)は、長年をかけて調査地の人々のなかで制作スタッフを育成し、撮影に協力してもらいながら制作を進めてきた。彼の作品では、カメラは撮影対象となる人々の内側に入り込んでおり、いまでも観るものに調査者と撮影対象となる人々との関係性について考えさせてくれる。

映像制作は人類学者ひとりの力だけではできないという技術的な制約が、裏を返せば映像制作を共同作業にしていたのであり、そこでは調査地の人々の理解と協力は不可欠であった(第5回共同研究会の討議内容)。

経験を共有すること

イヌイットの生活を描いた『極北のナヌーク』(ロバート・フラハティ監督、撮影1910-1921年、公開1922年)もまた、この問題を考えるうえで興味深い作品である。本作品の制作に着手したとき、フラハティは地質調査の探検家であり、人類学映像としてこの作品を制作したわけではなかった。したがって、本作品はある民族の生活・慣習を描



第5回共同研究会(2010年10月23日)。ジャン・ルーシュの映像制作術について議論した(村尾静二撮影)。

いたものではあるが、撮影時すでに消滅していた慣習であっても、調査地の人々がその撮影を望むなら、彼はそれを再現して記録した。例えば、撮影当時、すでに狩猟にはライフル銃が使われていたが、本作品にはイヌイットたちが銚子を使って狩猟する様子が丹念に何度も描かれている。それは異国情緒を感じさせる、魅力的な被写体でもあったのだろう。このような記録の仕方は、学術の基準に照らし合わせると正確さに欠けるものであり、実際に、人類学者から、イヌイットの姿をありのままに描いていないとして、これまで何度も批判されてきた。

しかし、信頼関係を築くこと、フィールドワークの経験を共有すること、といった視点からこの作品をとらえなおすなら、それとは別の評価をすることができる。フラハティはイヌイットたちとともに極寒の厳しい環境のなかで、撮影だけでなく、そこでフィルムを現像し、上映して意見交換することにより、制作を進めていった。イヌイット

たちも積極的に映像制作の一部を担い、自分たちの意見を映像制作のなかに取り込んでいった。先述した、消滅していた慣習の撮影も、多くはイヌイットたちの提案によるものだといわれる。両者は長年にわたり映画制作を協同し、映像制作の経験を共有したのであり、その成果である本作品はいまも十分なインパクトを持っている(第9回共同研究会の討議内容)。

わたしの映像

映像機器が個人仕様になるにともない、映像制作は人類学者のパーソナルな作業となった。映像制作を試みる研究者の裾野は次第に広がり、世界各地で頻繁に開催される民族誌映画フェスティバルを通して、数多くの民族誌映像作家が生まれようとしている。

映像人類学が活発化し、数多くの貴重な映像が後世に向けて残されるという点では、このような状況は喜ばしいことである。しかし、個人での撮影が可能になったことにより、調査地の人々の協力なしに映像制作は成立しないという基本が忘れられ、制作する側も、それを観る側も、映像作品をひとりの制作者の産物とみなす風潮が浸透しつつある。

そして、撮影の現場では、学術という大義のもとに、「人類学調査のために撮影に協力してください」という言葉では収まりきれない様々な要望が人類学者から調査地の人々に突きつけられようとしている。撮影期間が限られているとき、信頼関係が築かれる前に無理な撮影が行われ、日常を静かに観察するよりも、刺激的な映像を求めて劇的な演技が人々に求



フィールドワークにおける映像制作の様子。インドネシア、スマトラ島西部、イスラム礼拝所スラウにて、礼拝の様子を映像記録する筆者(2003年撮影)。

められる。人々の承諾を得ないまま映像作品が公開されることも実際にはあるようである。

民族誌映像の制作に多くの人が関心をもち、様々な方法でその試みが始まっている一方で、映像制作は共同作業であるという構図は揺らぎ、このような状況をきちんと評価する基準は曖昧なままである。

映像の共有人類学

しかし、多くの人類学者が自分の調査地を「わたしの村」と所有格で語ることに躊躇するように、「わたしの作品」と語ることにためらいを覚える制作者も少なくないように思う。そのためらいのもとになっているのは、人類学者と調査地の人々とともに映像制作の当事者であるとする感覚であろう。

このようなためらい、感覚を、映像制作における認識論の問題として多角的に考察し、方法論の問題にフィードバックしていくことが、共同研究の本年度のテーマとなっている。

また、それに近づくには、映像(映画)研究の理論的蓄積をも理解し、映像を批判的に解釈する視点を養うことが重要である。著名な映画監督の多くが、自身のキャリアを映画研究者や批評家としてスタートしているのは偶然ではない。

今後、フィールドワークに映像を活用する人類学者が増えるに従い、映像の題材も多様化していくであろう。ただ、それが人類学映像である限り、そこに変わらず映しだされるのは人類学者と調査地の人々の関係性である。この意味において、人類学映像とは、両者の関わり合いの記録といいかえることもできよう。

共同研究会では、フィールドワークに映像機器をもちこむことは映像の共有人類学に関与することであるという枠組みを構想するなかで、これらの問題について今後も検討を進めていきたい。

むらお せいじ

国立大学法人総合研究大学院大学・学融合推進センター助教。専門は映像人類学。論文に「映像人類学の現在」(『世界は映画を記録する——ドキュメンタリー再考』村山匡一郎編、森話社、2006年)。民族誌映像に「護りの時空」(インドネシア、スマトラ島 2007年)、「老いの時空」(インドネシア、バリ島 2008年/ポーランド、トルン映像人類学映画祭にて上映)がある。